

明代における史書の評点

― 八股文との関係を中心に ―

張 小 鋼

一

史書の評点は宋代に、すなわち評点という文章批評の形式が確立すると同時に現れたのである。たとえば眞徳秀の『文章正宗』に『左伝』『史記』についての評点が見られる。しかしながら、それは史実や人物の評価が多くて、必ずしも文章論という視点からの評点ではなかった。したがって清の紀昀は『四庫全書提要』の中で、「其持論甚嚴，大意主于論理而不論文。」（その持論は甚だ嚴密であり、全体的には理「思想・内容など」を論じるものであり、文「構文・言葉使用など」を論じるものではなかった。）と文章の批評に重点を置いていないことを指摘している⁽¹⁾。

文章の構文法などを主眼にし、史書の評点をはじめたの

はやはり明代に入ってからのことである。明代に史書評点は盛んに行われた。大体、萬曆朝以前の史書評点状況は『史記』についていえば、凌稚隆の『史記評林』（萬曆三二、一五七四）の引用書目に見える。次にその「評」と称するものを抄録しておく。

『史記題評』

『王守溪史記評抄』

『陳石亭史記評抄』

『何燕泉史記評抄』

『王欣佩史記評抄』

『茅見滄史記評抄』

『董澗陽史記評抄』

『凌藻泉史記評抄』

『梶野史記評抄』

『茅鹿門史記評抄』

『張王屋史記發微抄』

『王尊巖史記評抄』

上記の評点本を見ると、正徳朝（一五〇六～一五二二）の楊慎の『史記題評』が最も古い。他は殆ど嘉靖、隆慶兩朝に集中している。凌稚隆の『史記評林凡例』によると、上記のうち楊慎の『史記題評』を除き、皆抄本であった。ところが、萬曆朝に入ってから少なくとも抄本も刊行された。筆者の知っている限り、少なくとも以下のいくつかの重要な『史記』評点本がある。

嘉靖朝（一五二二～一五六六）

唐順之『荊川先生精選批点史記』

茅坤『史記抄』

穆文熙『史記』

隆慶朝（一五六七～一五七二）

李廷機『李九我先生批評史記』

鄧以讚『史記輯評』

鄧以讚『史記叢評』

萬曆朝（一五七三～一六一〇）

孫鑑『孫月峰先生批評史記』

湯賓尹『新刻霍林湯先生評選史記』

『新刻霍林湯先生評選史記玉壺水』

鍾惺『鍾伯敬先生評史記奇抄』

李光縉『史記綜芬』

凌稚隆『史記纂』

梅之渙『長公梅太史訂選史記神駒』

天啓朝（一六二一～一六四四）

陳仁錫『陳太史評閱史記』

崇貞朝（一六二八～一六四四）

陳臥子『陳臥子先生測議史記』

全体から見ると、明朝における『史記』についての評点は萬曆朝に至りピークに達し、それ以後徐々に衰える。『左伝』も大体同じ状況にある。実際には多くの『史記』の評点は同時に『左伝』の評点者でもあったゆえに、いわば『史記』の評点状況は大体明代の史書評点の実状を反映している。なかでも凌稚隆の『史記評林』、孫鑑の『孫月峰先生批評史記』及び陳子龍『陳臥子先生測議史記』は『史記』の文章批評についての代表的評点本と思われる。こうした評点盛況の社会背景はやはり明代の科挙試験制度である。その点について主に三つの方面から分析してみる。

第一に、史書の評点物はほぼ成化朝以後刊行されており、八股文が特殊な文体として確立した後のことである(2)。明朝初期、太祖朱元璋は洪武三年に詔書を下し、科挙制度を

実施するように命じた。基本的には宋代の科挙制度を受け継ぎ、四書五経を筆記の内容とするものである。初期の筆記試験はまだ厳格な八股文ではなかった。明の王世貞の「郷試會試文字程式」によると、第一場の五経試験問題はそれぞれ五百字以上で、四書の試験問題はそれぞれ三百字以上であり、第二場の禮樂論は三百字以上であり、第三場は面接の試験であるが、騎乘、弓道、書道、律などが入る。殿試（皇帝自らの面接）は「時務策」の文章を一千字以上であるという(3)。文章の試験が簡潔である一方、実務の能力も重視する。洪武六年に朱元璋は中書省に「論旨」を下し、科挙試験によつて取つた人材は若い人が多く、文章はなかなかうまいが、実務の能力はあまり望ましくないと指摘したうえ、その年の科挙試験を取りやめ、改めて実務能力重視の姿勢を示したのである。

しかし科挙制度の実施によつて下層の貧しい知識人たちのために出世の道を開き、人々は合格するために最大な情熱で文章を研究し、作文の秘訣を見出そうとしていた。それに対し、出世の関門が狭く、受験生の作文の腕がうまくなる一方、試験官もますます難しい問題を出す。文体に対する規定も厳格になりつつある。ついに「截搭題」という奇怪な出題の方法まで考案されたほどである(4)。

顧炎武の『日知録』(卷十六)によると、八股文の形成は

成化年間(一四六五〜一四八七)のことであるという。高塘の『明文鈔三編』の説明によると、明の成化の文恪公王鏊が出てから八股文の文法が漸く精密になり、後の人々に「制義開山」(八股文の開山の祖)と尊ばれた。正確にいえば、王鏊は八股文の「文法」を確立させた一人である(5)。彼は「六経には文法あり」という主張は孫鑣よりずっと早かった。

成化以後、弘治(一四八八〜一五〇五)を経て正徳(一五〇六〜一五二二)になると、前掲の楊慎の『史記題評』が現れたのである。前後の間隔は二十数年にすぎなく、決して偶然ではなかった。楊慎の『史記題評』は『史記』についての最も早い評点本と考えられる。現存の『史記題評』は殆ど「李元陽『史記題評』と記しているが、実際は中身を見ると、「李元陽輯訂、高士魁校正」となっている。批評した部分は宋代の劉須溪等のものもあるが、殆ど「楊慎」と署名したものである。李元陽(一四九七〜一五八〇)は明の嘉靖五年(一五二六)の進士であり、彼は直接楊慎の『史記題評』の原本に基づき編集していたと推測される。

第二に、史書の評点者は殆ど科挙試験の成功者である。主な代表的な評点者として、景泰朝(一四五〇〜一四五六)に、丘濬(景泰五年の進士)、成化朝(一四六五〜一四

八七)に王鏊(成化十年の解元、十一年の會元)、正徳朝(二五〇六〜一五二二)に楊慎(正徳六年の狀元、嘉靖朝(二五二二〜一五六六)に王慎中(嘉靖五年の進士)、唐順之(嘉靖八年の進士)、薛応旂(嘉靖十四年の狀元)、茅坤(嘉靖十七年の進士)、王世貞(嘉靖二十六年の進士)、汪道昆(嘉靖二十六年の進士)、王錫爵(嘉靖四十一年の會元・榜眼)、穆文熙(嘉靖四十一年の進士)、晁有光(嘉靖四十四年の進士)、隆慶朝(一五六七〜一五七二)に黃洪憲(隆慶五年の進士)、鄧以讚(隆慶五年の會元・探花)、萬曆朝(一五七三〜一六二〇)に孫鑣(萬曆二年の進士)、李廷機(萬曆十一年の進士)、陶望齡(萬曆十三年の進士)、焦竑(萬曆十七年の狀元)、肇淵(萬曆二十年の進士)、湯賓尹(萬曆二十三年の會元・榜眼)、王畿(萬曆二十六年の進士)、鍾惺(萬曆三十八年の進士)、顧錫疇(萬曆四十七年の進士)、天啓朝(一六二二〜一六二七)に陳仁錫(天啓二年の探花)、艾南英(天啓四年の舉人)、譚元春(天啓七年の舉人)、崇禎朝(一六二八〜一六四四)に陳子龍(崇禎十年の進士)などがいる。

この点について筆者はすでに他の論文で触れたことがあるため、ここでは重複しない。

第三に、さらに注目しなければならないことは、評点者たちの『左伝』『史記』に対する態度についてである。たとえば『左伝』については、陶望齡は「後之文章宗匠、罕能出其闕闕、殆文章之鼻祖」(後の文章の大家は、滅多に『左伝』を超えられず、ほぼ文章の鼻祖と言ってもよからう)と、『史記』については、韓敬は「文章至司馬遷の『史記』、而天下之能事畢矣」(文章は司馬遷の『史記』に至り、天下の文章家のできるものが終わった)と評論し、いずれも『左伝』と『史記』を文章の最高手本と見なしているのである。ちなみにそれは、大体明代の評点者の見方を代表する評価である。このような評価は、当然ながら評点者たちは八股文を批評する時も例外なく最高の法則とされたのである。彼らは序言や評点の随所に八股文の学習者に史書の作文法(いわゆる「文法」)を学ぶよう繰り返してすすめていた。

さて、明代の評点者たちはどのように史書を批評し、その中から「文法」と称するものを見出し、さらに自分の文章論を主張していたのであろうか。次に具体的に検証してみたい。

明代の史書評点における「文法」という言葉は今日の語学の Grammar という意味ではなく、「構文の方法」(または「作文の方法」という意味である。明代において早い時期から「文法」を重視したのはやはり王鏊である。彼は次のように述べている(6)。

世謂六經無文法，不知萬古義理，萬古文字皆從經出也。

其高者遠者未敢遽論，即如七月一篇敘農稼圃，內則敘家人寢興烹飪細，禹貢敘山水脈絡原委，如在目前。後世有此文字乎？論語記夫子在鄉在朝使檳等容，宛然畫出一個聖人，非文能之乎？昌黎序如書銘如詩，學書與詩也。其他文多從孟子，遂為後世文章家冠，孰謂六經無文法乎。

(世の中には六經に文法なしという者がいるようだが、それは万古の義理、万古の文章はみな経より出たと知らないだけである。そのなかの高いものや遠いものについてはあえてすぐには軽率に議論しないが、たとえば詩経「七月」という農家の生活を描写する一篇でも、中には家族の寝起きや食事を詳細に描かれている。また「禹貢」に山水の脈絡についての描写は宛も目の前にあるようである。後世にはこのような優れた文章があるであろうか。

「論語」の中に描かれている孔子の田舎や朝廷にいる様子、或いは外遊する様子は、宛も聖人のままのようである。文章でなければほかにできるであろうか。韓愈の序文は書経のようで詩経のようであり、そもそも書経と詩経を真似たにすぎない。その他の文章は「孟子」を真似たものが多い。遂に後世の文章家の手本となった。なぜ六經に文法なしと言えるであろうか。巻下、文章

王鏊の「文法」重視の主張は後の史書評点に大きな影響を及ぼされていた。『左伝』は史書としてだけではなく、六經の一つとしてもみなされる。したがって、優れた文章として批評されるものもごく自然の成り行きである。『史記』は六經に含まれていないが、最高の文章の手本として、前掲のように明代の評点者たちに認められているので、評点者たちが『史記』の文法を見出すのも不思議ではなからう。

明の数多くの史書評点物の中で、「文法」について最もよくまとめられているのは孫鏞の『孫月峰先生批評史記』と云えよう。大体二十八條の「文法」をまとめることができる。すなわち(1)簡叙法、(2)繁叙法、(3)略叙法、(4)詳叙法、(5)倒叙法、(6)綜括法、(7)綜叙法、(8)錯綜法、(9)闡意法、(10)攢要法、(11)激射法、(12)跌蕩法、(13)相間法、(14)節奏法、(15)反闡法、(16)開闔法、(17)安插法、(18)遠接法、(19)雙開法、(20)関鎖法、(21)刪潤法、(22)調法、(23)綱領法、(24)提綱挈領法、(25)虚字

撐使法、(26)借客形主法、(27)承上接下法、(28)首尾法とある。これらの「文法」は概して三つの特徴がある。

その一は、明代における史書評点の「文法」は「叙事」、すなわち物事の記述や描写に重点を置いていることである。それは史書の性格に規定されているため、評点者たちは批評の対象を離れて勝手に批評することができないからである。帰有光は「學者作文最難事。古今善敘事者、左氏司馬氏而已。如敘鄭莊公本末、此左氏筆力最高者。」(学ぶことは作文が最も困難なことである。古今の叙事をよく出来る者は、左氏と司馬氏のみである。たとえば鄭莊公の描写については、左氏の筆力が最も優れている。)と述べて、「叙事」は最も難しいことを指摘している(7)。言うまでもなく「叙事」を特徴とする史書はその手本となるわけである。したがって史書にある「文法」を体得しなければならぬ。その二は、明代の「文法」はまだ厳密な定義をもっていないことである。たとえば簡叙法と略叙法、繁叙法と詳叙法、開閉法と関鎖法、綱領法と提綱繫領法との間はどんな相違があるかは厳密な定義がない。また、錯綜法と錯綜勢、激射法と激射勢のように、文法と文勢とが区別されない場合もある。「勢」という言い方は『詩話』によく見られる。『詩話』は禅学の影響が強く、禅学が直接、或いは間接的に史書の評点にも影響を与えたに違いないが、『詩話』のほ

どその影響を強く受けていない。

その三は、明代の文法は基本的に「簡潔」を美文のモットとしてしていることである。孫月峰は「事以隱妙、語以隱妙、文以簡妙」(内容は怪異の方がよい。言葉は含みを持ったほうがよい。構文は簡潔の方がよい。)と述べ、「簡潔」を中心に批評を展開している。「文法」における「精微」(又は「精核」「精密」「嚴密」「嚴核」なども言う)や「剪裁」についての議論はいずれも「簡潔」を基本としたものである。たとえば「剪裁」について孫月峰は「文貴有裁、以簡御繁」(文章は重要なのは簡潔にすることであり、すなわち簡潔の形式を以て繁雜な事柄を表現することである。)(卷五十五)と明確に主張している。『史記』劉敬叔孫通列伝のなかで、孫月峰は「只百七十字、而時、地、人物皆形聲靡不悉」(わずか百七十字で、時間、場所、人物の描写は皆いきいきとしてよく分った。)(卷九十九)と批評し、彼の「文簡」論の裏付けとなっている。この類の批評は至るところに見られる。しかも似たような観点は他の評点本にもよく見られる。たとえば『史記纂評』卷八に「垓下之戰、僅六十字」(垓下の戦いの描写について、わずか六十字である。)(との評語がある。それらの文章はいずれも少ない字数で複雑な内容を精彩に描写した好例である。「簡潔」と関連して孫月峰はまた「腴」「鍊」などの概念を打ち出した(8)。

明代の評点者たちが史書を重視する背景には、科挙制度、とりわけ八股文のことを強く意識したことにある。清の桐

城派の代表的人物である方苞（望溪）は、

時文乃代聖賢之言。非研經究史，則議論無根據。非有忠孝仁義之至性。雖依仿儒先之言。而不足以感發人心。（八股文はすなわち聖賢の口調を真似るものであり、経書や史書をよく知らなければ、根拠のない議論することになる。忠孝仁義という最高の性情がなければ、たとえ聖賢の言葉を真似ても人の心を感動させ、啓発させることができないだろう。）（黄淳耀「得百里之地而君之為也」評語）

と述べ、八股文における経書や史書的重要性を強調している(9)。これはまさに明人の考えを喝破したものである。史書の評点と八股文との関係について次の二点を指摘しておきたい。

まず、評点者たちは真の人材を育てるために、狭い書面知識しか勉強しないという偏向を正そうとした。前述したように、洪武六年に朱元璋はすでに当時の若い孝子が書面の知識（具体的に言えば四書五経のこと）を重視する偏向

を指摘したうえで、その年の科挙試験を中止したのである。しかしそれにもかかわらず、後にその偏向はますます激しくなっていく。程瑶田の『制科小録・陸象山課讀文序』巻一に、

時文盛於明而實學衰於明。唐宋已來若孔穎達、賈公彥、杜佑、鄭樵、劉敞、王應麟之流皆貫通經史，博及古今。明雖人材輩出，求實學如古蓋寡。邱文莊謂士有登名前列，不知史冊名目，朝代前後，字書偏旁者，顧寧人謂八股盛而六經微，十八房興而二十一史廢。皆有感於學問之衰，時藝為之也。（八股文は明朝に盛んであったが、その一方堅実な学問は明朝に衰えた。唐宋以降、孔穎達、賈公彦、杜佑、鄭樵、劉敞、王應麟等の輩は皆経書や史書に精通し、古今の博識の持ち主であった。明朝には人材は輩出するが、古人のような堅実な学問の持ち主が少くない。邱文莊はいう。「科挙受験者の中には上位成績で合格できるが、史書の名前や王朝時代の順序や文字の部首さえ知らない者がいる」と。道理で世間に八股文が盛んであったが、六経が衰えた。十八房の八股文集が盛んであったが、二十一史の史書が不要となったという言い方があるのである。それは皆学問が衰えたことは、八股文がその原因であることに嘆いたわけである。）

とある。文中の「十八房」とは科挙の成功者たちの八股文

作文集であり、したがって八股文の盛行によってそれまでの経学や史学の伝統が如何に破壊されたかを嘆いているのである。(10)

これに対し史書の評点者たちも同じ認識を示している。

顧錫疇は「方今盛明側席、須通今博古之學、寧維宋儒是賴。」(今日の明朝の君主を輔佐するのは、古今の博識を持っている人材が必要とされているのに、なぜか朱子学しか知らない人ばかり起用されている。)(『史記纂評・序』)と、国家の棟梁になる人材に対する危機感を表している。

明の胡應麟も「今文人所急者、先秦諸書；詩流所急者、盛唐諸書；舉子所急者、宋世諸書。」(今日の文人は先秦諸書の書物に、詩人は盛唐の諸詩集に、科擧の受験者は宋代の朱子学関係の書物にしか興味を持っていない。)(『少室山房筆叢』巻四)と、明の人たちがそれぞれの目的に限って讀書する現象を指摘した。

このような学識が偏った傾向を正すために、史書の評点者たちはまず史書を八股文の手本として考える。明の王畿は友人唐荆川(順之)の『荆川先生精選批点史記』のために書いた序文の中で「吾友荆川子嘗讀史漢書、取其體裁精且變者數十篇、以爲藝文之則。」(わが友である唐荆川は嘗て『史記』や『漢書』を読み、その文体が精密かつそれぞれ異なるもの数十篇を編纂して、八股文の規範とする。)と、

唐荆川の『史記』を評点する目的は八股文の模範にあることを指摘している。実際には史書の文章を八股文と直接に結びつけるのはなかなか難しかったため、王畿もそれを認めながら「師其意、不師其辭。」(その深意を習い、その言葉を習わない。)と、古文の形式より思想内容の精髓の吸収を強調する。

次に、評点者たちは八股文の形式主義の傾向を正そうとした。前述したように、明代の史書の評点者はほとんど科擧の成功者であり、八股文の作文名手である。したがって彼らは八股文の弊害を誰よりも知っている。受験者たちが科擧試験に合格するために、八股文の作文技術に専念した結果、形式主義の袋小路に入ってしまった、国が人材を選抜するという八股文本来の使命は果たすことができなくなつたのである。

明代の八股文における形式主義の傾向は、隆慶、萬曆朝からすでに見られ始めた。程瑤田は「逮湯霍林倡以機巧纖薄之法、文體始變。」(湯霍林は機巧纖薄の文法を提唱するようになってから、文体がはじめて変わった。)(『制科小録・陸象山課讀文序』巻一)と、湯霍林(賓尹)が「機巧纖薄」(または「機法」ともいう)を提唱し、形式主義の濫觴のきっかけを作つたという。

清の梁章鉅の『制義叢話』巻六の中に、「徐存菴曰：嘉靖

以前文以實勝、隆萬以後文以虛勝。嘉靖文轉處皆折、隆萬始圓。圓機、田鄧開之也、後漸趨於薄矣。嘉靖文妙處皆生、隆慶萬曆始熟。熟調、湯許開之也、後漸入於腐矣。」(徐存菴) 嘉靖以前、文章は實を以て得意とする。隆萬以後、文章は虚を以て得意とする。嘉靖の文章は切り替えるところが皆うまくいかなく、隆慶と萬曆になってからはじめて円滑に切り替えることができたのである。『円機』という円滑の方法は田一偶、鄧以讚によって始めたのである。その後徐々に軽薄となっていく。嘉靖の文章は妙所のところはまだ固いが、隆慶と萬曆になってからはじめて円熟となった。『熟調』という円熟の方法は湯顯祖、許癡によって始めたのである。その後徐々に陳腐な手法となっていく。)と

(11) 徐存菴は嘉靖と隆・萬兩朝の八股文を比較した結果、嘉靖の八股文の長所は「實」にあるが、一方隆慶と萬曆の八股文の長所は「虚」にある。嘉靖の八股文の文章の切り替えるところは硬く、この欠点を克服できて円滑になったのは隆慶と萬曆に入ってからのことであるという。興味深いことは、本来「円機」と「熟調」はみな八股文が成熟した印であるが、そこから同時に形式主義へ滑り込む転換点でもあった。

四

明代の評点者たちが史書を重視する意識は、後の八股文の評点者たちにも大きな影響を与えている。たとえば、清の高塘が編集した明の八股文集である『明文鈔』には史書を強く意識する評語がよく目にする。次に例を見てみよう。

○李叔元『今吾子以隣国為壑』(『明文鈔』初編中庸・上孟下孟)

尾批：左傳氣味、國策機鋒、後二比有意思、有奇氣、海市蜃樓之觀。

○帰有光『為我作君臣相悅之樂 好君也』(『明文鈔』四編中庸・上孟下孟)

尾批：或謂大家數不講風神、非也。看此文調諧音節、真絕世風神。但其醞釀深厚、風神從史漢歐曾得來。(王崧渠)

○唐荊川『鄭人使子濯孺侵衛』(『明文鈔』四編中庸・上孟下孟)

尾批：模擬史記文字作孟子敘事長題、當用此法。斷制凌駕者非也。(無名氏)

さらに、評点者たちは八股文の名手を左丘明、司馬遷に例えることもある。たとえば評点者の一人である王崧渠は

萬國欽の八股文「舜其大孝也與」を批評する際、「時文中史遷也。」（八股文の中の司馬遷である。）『明文鈔』五編下中庸」まで評価したのである。この評語はやや大袈裟かもしれないが、評点者の考え方を代表するものだと思うられる。同じ王耘渠であるが、「時文詬病、須左馬之筆」（八股文の病を治すには左丘明、司馬遷の筆が必要である。）と明確に指摘している。この考え方は前述の史書の評点者たちの議論とまさに合致している。

具体的批評には、八股文評点における史書評点とのかかわりもよく見られる。ここでは「文法」に焦点を当てて取り上げてみよう。（○の引用文は史書の評語であり、●の引用文は八股文の評語である。）

1. 主客（主賓）

○孫鑣評：并舉兩人軍法，借客形主，作抑揚頓挫勢，姿態最橫溢，最錯綜有調。（『孫月峰先生批評史記』卷一〇九李將軍傳）

○鍾惺評：因徐樂書嚴安與晏同上書，故插入二人在內。主客相安，此文字波瀾之妙。若他人一傳中強置此兩篇文字，則塞破矣。（鄧以讚『史記叢評』卷一百十二平津侯主父列傳）

●何義門評：殿所獨奔所同。亦析入門與將字作兩層，生出一賓一主，功罪分明，上下一線。（王鏊「奔而殿將入門」，

高塘『明文鈔』初編大學上論）

江若度評：寫上句重扼殿字逆入輕放棄字，有主有客。寫下句翻轉奔殿，伴說析入門與將入作兩層，以客襯主。局法變幻如武侯八陣圖。（王鏊「奔而殿將入門」）

●王已山評：顯易於改換字面，移入上句，須轉以上句相形，方切本位，此借賓定主法。（王青堂「人十能之已千之」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

●無名氏評：上三字涵蓋一切，下截包孕裏許文熟於賓主逆順之法。思致繽紛，才情橫溢，窘枯者當以此等文擴之。

（黎志陞「蕩蕩乎民無能名焉」，高塘『明文鈔』六編大學上論）

2. 虛實

○孫鑣評：兩事。一虛一實，一濃一淡，正是節奏。此明是捉張以對樂，亦只是以事雙，乃不寂寥耳。（『孫月峰先生批評史記』卷七十一樗里子甘茂列傳）

○孫鑣評：貴虛實相錯，此蓋羅絳列是虛，過樛將軍是實。無下實則上淡無上虛則下意不透，合乃濃腴。（『孫月峰先生批評史記』卷九十一黥布列傳）

●陸稼書評：六股內先言微脫貨寵，次言消禍逐福，是由虛漸實之法。（顧錫疇「季氏旅於泰山」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

●王已山評：題分兩截，上實下虛。寔處回斡分明，處處

濛濛不竭。得手在上下各分賓主，卻自斷續相生融結一片，情景入神。（王鏊「奔而殿將入門」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

●無名氏評：通篇不見一諾字，卻字字有諾字神理。蓋諾字有音無詞，最須善理會也。看他由虛入實，由淺入深，是何等層次。（鍾惺「孔子曰諾」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

●何義門評：虛描實襯，皆於一戎衣三字著筆。（徐常吉「壹戎衣而有天下」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

●王已山評：起二比直落不知，題事已盡矣。中間妙用借實襯虛之法，兩以事後知之，襯事前之不知。後一以叔之自知，襯公之不知，一以公之知武庚，襯公之不知叔，便覺題步寬然。卻不礙後文問答也。（王慎中「不知也」，高塘『明文鈔』初編大學上孟下孟）

3. 激射

○孫鑛評：故作理外語，用生下甚隋快，此是激射法。（『孫月峰先生批評史記』卷七十張儀列傳）

○孫鑛評：然字應，亦是激射勢。（『孫月峰先生批評史記』卷七十張儀列傳）

●王已山評：暗藏下節虛運本題，一灣一曲，相為激射，筆筆圓靈。此種文在時藝中可謂規矩方圓之至。（湯賓尹「今也純儉吾從眾」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

4. 開合

○孫鑛評：總收衛氏語，有情致，然不入之前段，卻收在諸褫將後，正是開閣法。（『孫月峰先生批評史記』卷一百一匈奴列傳）

●陸稼書評：前四股以不可使有，陪起不能遂無。此兩股一開一閣之法。以無過悔過，陪起寡過，此一股本自為開閣之法。（鄧以讚「夫子欲寡其過而未能也」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

●無名氏評：此題乃是一串意，不應兩對。荊川開中有合，其妙可以意求。（唐順之「匹夫而有天下者」，高塘『明文鈔』初編下論中庸）

5. 簡潔

○孫鑛評：一下俱用簡敘法，頗勁核有色，蓋亦自春秋經變來。（『孫月峰先生批評史記』卷一五帝本紀）

○孫鑛評：諸事已多見呂后紀，此係重敘。然此處單總括闡閣事，又別一種情節。而此敘得攢湊，意態固濃，亦可見簡敘法。（『孫月峰先生批評史記』卷四十九田敬仲完世家）

●方望溪評：文簡而理足，體方而意圓。四比中已開後人無數變化參差之妙，不得以平易置之。（岳正「今天天」，高塘『明文鈔』三編）

●王已山評：精簡不欲留一贅字，而氣魄奇偉，如高山鉅谷。龍虎變化，乃真所謂傑魁。（張居正「生財有大道」，高塘

『明文鈔』四編大學上論下論

●方望溪評：題緒雖雜，無一節可脫略。文能駁繁以簡，毫髮不遺。而出以自然，由其理得而氣清也。（顧允成「是以君子有契矩 忠信以得之」高塘『明文鈔』五編大學上論）

6. 承上起下

○孫鐵評：若承上起下者，然文字須如此機乃圓。（『孫月峰先生批評史記』卷五十五留侯世家）

●陸稼書評：開講從交情上說起，見君子之交，與常人不問，此是承上起法。（鄧以讚「天子欲寡其過而未能也」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

●陸稼書評：開講是承上起法。八股要看其由虛漸實，由淺漸深之妙。（繆尊素「出」，高塘『明文鈔』初編大學上論）

●汪鈍翁評：末句是承上起下語耳。通章何嘗以未受命為善述。但題既截住，便有相題行文之法，必曰大全云何，蒙引云何，此村學究可與說書，未可與評文也。（顧起元「子述之武王未受命」，高塘『明文鈔』二編大學上論）

●方望溪評：此是承上引下語脈，文家易生轆轤。得此篇而題解始透。（王樵「故君子不可以不修身」高塘『明文鈔』四編上孟下孟中庸）

7. 首尾呼應

○孫鐵評：是血脈貫穿文字第，華藻未備，且未甚工峭，諸呂事首尾悉具。（『孫月峰先生批評史記』卷九呂后本紀）

●艾千子評：一味空靈，可稱雲中俊鶴。前呼後應處，尤見混成無痕。（儲懌「道之以政」高塘『明文鈔』初編論語上）

凌仲遠評：承接二比，如行龍過峽，如健鶴摩空，有此一段在中。所以分合如意，擊尾則首應，擊首則尾應。（同上）

●汪武曹評：上二章言樂，末章言禮，第三章則兼禮樂而言之。以第三章作主。擊其中而首尾應，乃天生局法。（中略）凡作古文時文者，皆不可不知也。（李光緒「孔子謂季氏禪四家」高塘『明文鈔』二編論語上）

五

明代における史書の評点は科挙試験制度の実施によつて、文章が重視される風潮の中で盛んに行われていたのである。明代以前の「論理」を中心とした評点と異なり、「文法」を中心とした「論文」の評点内容がその特徴である。その転換は文学批評史において大きな意義がある。すなわち史書評点は理論上明代八股文の作文に対し積極的な役割を果たしたうえ、大量な事例から「文法」（構文法）を形成させた。したがって評点が内容から形式まで、明代文学批評の成立

と展開のために条件を整え、名実ともに明代文学批評の主
流となつたのである。

なお、もう一つ見逃してはならないのは明代における多
くの史書評点者が科挙の成功者だけではなく、同時に当時
文壇において活躍した領袖でもあることである。たとえば
復古派の王世貞をはじめとする前後七子はもとより、唐宋
派の唐順之、茅坤、帰有光らも史書の評点に情熱を注いだ。
その根本的な原因はやはり『左伝』『史記』がすべての文章
の祖であり、文章の最高の手本だという共通な認識があつ
たためである。たとえば、たとえ唐宋派でも『左伝』『史
記』と韓愈、欧陽修、三蘇との淵源関係を認める。清の方
苞は次のように唐順之、帰有光における古文（韓愈、欧陽
修などの文章）と八股文との関係を指摘している。

○以古文為時文、自唐荆川始、而歸震川又恢之以闡肆。
如此等文實能以韓歐之氣、達程朱之理。（歸有光「吾十有
五、高塘『明文鈔』四編大學上論下論」）

○歸唐皆以古文為時文。唐則指事類情、曲折盡意、使人
望而心開；歸則精理內蘊、大氣包舉、使人入其中而茫然。
蓋由一深透於史事、一兼達於經義也。（唐順之「三仕為令
尹」高塘『明文鈔』四編大學上論下論）

要するに、韓・欧の古文を八股文に率先して取り入れた
のは唐順之であつたが、後に帰有光がさらに韓・欧の古文

を八股文に融会貫通させたのだという。しかしながら韓愈
や欧陽修もやはりそれぞれに史書から文章の三昧を学んだ
のである。清の俞世寧は二人の風格と史書との関係を次の
ように述べている。

韓學史記、得其雄烈；歐學史記、得其縹緲。（趙南星「齊
景公有馬千駟」高塘『明文鈔』五編中庸下論）

すなわち、唐の韓愈は『史記』から「雄烈」を、宋の欧陽
修は『史記』から「縹緲」をそれぞれに学んだという。結
局、唐宋派にしても『左伝』『史記』なしでは文章を語るこ
とができないであろう。

史書の評点は八股文の偏向を正すという目的がある程度
で果したが、評点という形式は文章の具体的批評が多く、
より理論的思弁的な体系を形成することができず、その限
界を露呈したのである。結局、清末に科挙制度の廃止と共に
八股文もその終焉を告げ、評点も明清文学批評の主要形
式としての使命を終えた。代わりに「西学東漸」の波に乗
り、西洋の文学批評様式と理論が中国近代文学批評の主流
となつた。

注釈

1. 宋・眞徳秀『文章正宗』、『欽定四庫全書』集部八
2. 八股文についてはいろんな説があり、その詳しいことは清人梁章鉅の『制義叢話』や盧前の『八股文小史』などの書物に紹介されている。しかし清人顧炎武の説が一般的である。本論も顧炎武の説に従う。
3. 明・王世貞の『弁山堂別集』巻八十一、または李調元の『制義科瑣記』にも詳細に記している。
4. 鄧雲鄉の『八股文小史』(一四頁、中国人民大学出版社、一九九四年)によると、「截搭題」と「就意把上面一章書の最後一個句或幾個字和下一章書的開頭幾個字或開頭一句聯在一起甚至語不成文照樣可以作為題目以之寫作八股文」(すなわち前の一章の最後の一句或いは数文字をもって、次の章の始めの数文字或いははじめの一句とつなげさせ、題目とするという)。
5. 王鏊が八股文の文法を確立させた評価はほかにもある。たとえば梁傑は『四書源流考』(『皇朝經世文編』巻五學術)の中に「而時文之法日密、體亦屢遷。景泰天順以前、渾樸未開；隆慶萬曆以後、風氣漸降。其間巨手、未可屈指。約而綜之、王守溪造其極、歸震川振其緒、金正希持其終。他若于廷益之忠節、陳白沙之理學、薛方山之史才、唐荆川茅鹿門之經濟、楊昇菴季彭山之儉雅、出其餘技、皆勝專門。(中略)其時又若黃陶菴陳臥子者、皆秋霜皎日、其文字頡頏於西江四雋之家、遂以結明代時文之局。」とあり、王鏊(守溪)は八股文の文法を極めたと評価している。
6. 明・王鏊『震澤長語』、『百部叢書』寶顏堂秘笈影印本
7. 明・帰有光『文章指南・仁集』六十七頁、台湾広文書局影印本 中華民國六十一年
8. これについては拙論『孫月峰の文章論——『孫月峰先生批評史記』を中心に』(関西大学『中國文學會紀要』第二十三號、平成十四年三月) 詳しい紹介がある。
9. 清・高塘『明文鈔六編・中庸上卷前』、乾隆五十一年刊本
10. 程瑤田『制科小錄・陸象山課讀文序』のほかに、清人趙翼の『陔餘叢考』卷三十三「刻時文」によると、十八房の刊行は萬曆壬辰(萬曆二十、一五九二)に始まった。『鈞元錄』から始めて批点を加える形となり、王房仲が『程墨』を編集した後、坊刻本が徐々に増えてきた。大体四種類ある。『程墨』とは主司や士子の文章であり、『房稿』とは十八房の進士の旧作であり、『行卷』とは筆子の文章であり、『社稿』とは諸生の会課の作である。各科目の房考の刻本は蘇州や杭州より出版されている。北方の商家はそれを買取り販売したという。
11. 清・梁章鉅の『制義叢話』巻六一六六頁、廣文書局影印本、中華民國六十五年